

『伊勢物語』「月やあつぬ

1、はじめ」

・作者…未詳

・成立…平安時代〔平安時代は794～1185年〕

・ジャンル…歌物語

・特徴…歌とそれに基づいた話を交えて書かれる歌物語。全125段からなる。多くの段で「むかし、男」の冒頭句からはじまる。その男は、実在したあつむらのなりひら在原業平がモデルではないかといわれている。

・要約

昔、左京の五条大路に、皇太后が住んでいた屋敷の西側に住む人（藤原高子）がいた。この女を、かねてからの願い通りにはできない（成就できない恋愛）で、愛情の深い男が訪ねていた。しかし高子は他所に行ってしまう、男は女のもとに行くこともできないのでつらい思いをしていた。翌年、男はもとの屋敷を訪ねるが、屋敷は去年とは似ても似つかない様子なので、男は「私の気持ち以外はすべて変わってしまったのか」という和歌を詠み、泣きながら帰った。

2. 1、本文

昔、東ひんがしの五条に、大后おほきさごの宮おはしましける西たいの対に、住む人ありけり。それを、本意ほんいにはあらで、心ざし深かりける人、行き訪たづひけるを、睦月むしづきの十日ばかりのほどに、ほかに隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通つべき所にもあらざりければ、なほ、憂しと思ひつ
つなむありける。

またの年の睦月むしづきに、梅の花の盛りに、去年こぞを恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷いたじに、月の傾かたむくまで臥ふせりて、去年を思ひ出でて詠める、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一しはもとの身に
と詠みて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

2. 2、本文

昔、東ひんがしの五条※1に、大后おほきさきの宮※2おはしまし☆1ける西たいの対たいに、住む人※3ありけり。
それを、本意ほんい☆2にはあらで、心ざし☆3深とくかりける人、行き訪とくひけるを、睦月むつき☆4の十日は
かりのほどに、ほかに隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通とくつべき所にもあらざりけれ
ば※4、なほ、憂うれしと思ひつしなむありける。

またの年の睦月むつきに、梅の花の盛りに、去年こねを恋こひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、
去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あはらなる☆5板敷いたじきに、月の傾かたむくまで臥ふせりて、去
年を思ひ出でて詠める、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一しはまとの身にたして
と詠みて、夜のほのほのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

3、補足・注／重要単語・文法

【補足・注】

※1東の五条…左京の五条大路。

順子の姪にあたる。

※2大後の宮…皇太后（天皇の生母）。ここ

※4人の行き通うべき所にもあざざりければ…高

では藤原順子。

子は宮中に嫁いだので、並みの人では会いに

※3西の対に、住む人…寝殿の西の対に住

いけない。

む人。のちの清和天皇の后で、高子^{たかいこ}のこと。

【重要単語・文法】

☆1おはしまし…「あり」「居り」の尊敬語。

☆3心ざし…愛情。

「おはす」「に」「ます」「がついたもの。サ行四

☆4睦月…陰暦の正月。

段活用。

☆5あぼらなる…がらんとしている。隙間

☆2本意…かねてからの願い。「こころでは、そ

がある。ぼるぼるの。

の願い通りにはいかないでという意味。

4、現代語訳

昔、左京の五条大路に、皇太后が住んでいた屋敷の西側に住む人（藤原高子）がいた。その女を、かねてからの願い通りにはできなから（＝思うように成就できない恋愛であった）が、愛情の深い男が、訪ねていたが、一月の十日（男）（高子は（他所）に行っていました。）男は高子の（居場所）（＝宮中だとういふこと）を聞けけれど、人の行けなさそうなるので、やはり、しつらふと思つて過（あ）つた。

翌年の一月、梅の咲き誇るころに、（男は）昨年を恋しく思つて、（女が越す前にいた場所）で立って見て、座つて見て、（うつろひ）見るけれど、（高子とは）似てゐるはずもない。ひたすら泣いて、がらんとした板の間で、月が傾くまで横になつて、去年のことを思い出して詠んだ。

6

月は（昔のままでは）ないのでしょつか。春も昔のままではないのでしょつか。私だけは昔のままなのだ。

と詠んで、夜がほのぼのと明るくなるころに、泣きながら帰った。

5. 1、本文と現代語

昔、左京の五条大路に、皇太后が住んでいた屋敷の西側に住む人（藤原高子）がいた。その女を、かねてからの願い通り

昔、東の五条に、大后の宮おはしましける西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはできない（＝思うように成就できない恋愛であった）が、愛情の深い男が、訪ねていたが、一月の十日に、（高子は）他所に

はあらで、心ざし深かりける人、行き訪ひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、ほかに隠行ってしまった。（男は高子の）居場所（＝宮中だということ）を聞くけれど、人の行けなさそうところなので、やはり、しづいと想ひれにけり。あり所は聞けど、人の行き通つべき所にもあらざりければ、なほ、憂しと思ひつて過ぎつていた。

つなむありける。

翌年の一月、梅の咲き誇るころに、（男は）昨年を恋しく思って、（女が越す前にいた場所で）立って見て、座って見て、（いっそ）見るけれど、

またの年の睦月に、梅の花の盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、昨年の（様子とは）似ているはずもない。ひたすら泣いて、がらんとした板の間に、月が傾くまで横になって、去年

去年に似るべくもめらさず。うさ泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くまで臥せりて、去年のこころを思い出して詠んだ。

を思ひ出でて詠めぬ、

月（は）昔のままでは（ない）のでしろうか。春も昔のままではないのでしょうか。私だけは昔のままなの。
617。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一しはせとの身にたてて

と詠んで、夜がほのぼのと明るくなぬころに、泣きながら帰った。

と詠みて、夜のほのぼのと明るく泣く泣く帰りにけり。

5. 2、本文と現代語訳

昔、左京の五条大路に、皇太后が住んでいた屋敷の西側に住む人（藤原高子）がいた。

昔、東の五条※₁に、大后の宮※₂おはしまし☆₁ける西の対に、住む人※₃ありけり。

その女を、かねてからの願い通りにはできない（＝思うように成就できない恋愛であった）が、愛情の深い男が、訪ねていたが、一月の十日¹

それを、本意※₂にはあらで、心ざし☆₃深かりける人、行き訪ひけるを、睦月☆₄の十日ばるに、高子は（他所に行ってしまった）。男は高子の（居場所（＝宮中だということ）を聞けれど、人の行けなほさうなところなの

かりのほどに、ほかに隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通つべき所にもあらざりければ、やはりうしろうらと思つて過ごしていた。

ほ※₄、なほ、憂しと思ひつしなむあひける。

翌年の一月、梅の咲き誇るころに、（男は）昨年を恋しく思つて、（女が越す前にいた場所で）立って見て、座つて見て、（いっそ）見るけれど、

またの年の睦月に、梅の花の盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、昨年の（様子とは）似ているはずもない。ひたすら泣いて、がらんとした板の間に、月が傾くまで横になつて、去

去年に似るべくもあらはず。うち泣きて、あはらなる板敷に、月の傾くまで臥せりて、去年のことを思い出して詠んだ。

年を思ひ出して詠める、

月は昔のままではないのでしようか。春も昔のままではないのでしようか。私だけは昔のままなの。
611。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一しはせとの身にて

と詠んで、夜がほのぼのと明るくなぬころに、泣きながら帰った。

と詠みて、夜のほのぼのと明くるぬと泣く泣く帰りてはひ。

6、品詞分解

単語	品詞等
昔、	名詞
東	名詞
の	格助詞
五条	名詞
に、	格助詞
大後の宮	名詞
おはしまし	動詞・四段・連用形(尊)
ける	助動詞・過去・連体形
西	名詞
の	格助詞
対	名詞
に、	格助詞
住む	動詞・四段・連体形
人	名詞
あり	動詞・ラ変・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
それ	代名詞
を、	格助詞

本意	名詞
に	格助詞
は	係助詞
あら	動詞・ラ変・未然形
で、	接続助詞
心ざし	名詞
深かり	形容詞・ク活用・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
人、	名詞
行き	動詞・四段・連用形
訪ひ	動詞・四段・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
を、	格助詞
睦月	名詞
の	格助詞
十日	名詞
ばかり	副助詞
の	格助詞
ほど	名詞
に、	格助詞

ほか	名詞
に	格助詞
隠れ	動詞・下二段・連用形
に	助動詞・完了・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
あり所	名詞
は	係助詞
聞け	動詞・四段・已然形
ど、	接続助詞
人	名詞
の	格助詞
行き通う	動詞・四段・終止形
べき	助動詞・可能・連体形
所	名詞
に	助動詞・断定・連用形
も	係助詞
あら	動詞・ラ変・未然形
ざり	助動詞・打消・連用形
けれ	助動詞・過去・已然形
ば、	接続助詞

なほ、	副詞
憂し	形容詞・ク活用・終止形
と	格助詞
思ひ	動詞・四段・連用形
つつ	接続助詞
なむ	係助詞（係）
あり	動詞・ラ変・連用形
ける。	助動詞・過去・連体形（結）
またの年	名詞
の	格助詞
睦月	名詞
に、	格助詞
梅	名詞
の	格助詞
花	名詞
の	格助詞
盛り	名詞
に、	格助詞
去年	名詞
を	格助詞

恋ひ	動詞・上二段・連用形
て	接続助詞
行き	動詞・四段・連用形
て、	接続助詞
立ち	動詞・四段・連用形
て	接続助詞
見、	動詞・上一段・連用形
居	動詞・上一段・連用形
て	接続助詞
見、	動詞・上一段・連用形
見れ	動詞・上一段・已然形
ど、	接続助詞
去年	名詞
に	格助詞
似る	動詞・上一段・終止形
べく	助動詞・当然・連用形
も	係助詞
あら	動詞・ラ変・未然形
ず。	助動詞・打消・終止形
うち泣き	動詞・四段・連用形

て、	接続助詞
あばらなる	形容動詞・ナリ・連体形
板敷	名詞
に、	格助詞
月	名詞
の	格助詞
傾く	動詞・四段・連体形
まで	副助詞
臥せ	動詞・四段・已然形
り	助動詞・存続・連用形
て、	接続助詞
去年	名詞
を	格助詞
思ひ出で	動詞・下二段・連用形
て	接続助詞
詠め	動詞・四段・已然形
る、	助動詞・完了・連体形
月	名詞
や	係助詞（係）
あら	動詞・ラ変・未然形

ぬ	助動詞・打消・連体形（結）
春	名詞
や	係助詞（係）
昔	名詞
の	格助詞
春	名詞
なら	助動詞・断定・未然形
ぬ	助動詞・打消・連体形（結）
わ	代名詞
が	格助詞
身	名詞
一つ	名詞
は	係助詞
もと	名詞
の	格助詞
身	名詞
に	助動詞・断定・連用形
して	接続助詞
と	格助詞
詠み	動詞・四段・連用形

て、	接続助詞
夜	名詞
の	格助詞
ほのぼのと	副詞
明くる	動詞・下二段・連体形
に、	格助詞
泣く泣く	副詞
帰り	動詞・四段・連用形
に	助動詞・完了・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形

月やあらぬ／ 春や昔の 春ならぬ／

わが身一つは もとの身にこして

【解釈】

月は(昔の)ままでは(な)ないのでしょうか。春も昔の(ま)までは(な)ないのでしょうか。私だけは昔のままなの(よ)。

【修辞法】

○初句・三句切れ

○係の結び…「やゝぬ」。係助詞「や」が打消の助動詞「ず」にかけり、連体形「ぬ」になつてゐる。

○対句的表現…「月やあらぬ」と「春や昔の春ならぬ」

【単語】

○係助詞「や」…これは疑問説と反語説があり、こゝでは疑問とする。疑問とした場合、「月も春も変わつてしまつたのか」という意になる。一方で反語とした場合、「月も春も変わるはずがなら」という意になり、敬意が(上)の句、下の句を倒置はせ(私だけがもとの身に)月や春だけが変るといふわけがないのだ、すべてが違つて見える」となる。